

柴田翔編著 『初めて学ぶドイツ文学史』

(ミネルヴァ書房, 2003年)

有 賀 健

「まったく予備知識のない若い読者に、ドイツ語圏の文学と歴史のおおよそを無理なく理解してもらうことを、まず第一の目標として編纂された本書」(1頁)をそのつもりで読んで気がついたことなどを以下にする。

*

ドイツ文学の誕生までをのべた序章に続く全8章の構成は、第1章が「演劇概説 代表的作家と作品」を欠く点をのぞけばすべて同じで、「時代思潮」「叙事詩・散文概説 代表的作家と作品」「詩概説 代表的作家と作品」「演劇概説 代表的作家と作品」からなる。「時代思潮」は3ないし5頁、各概説は2ないし3頁と簡潔で、代表的作家と作品については1名から5名の作家をえらんで経歴を紹介し、それぞれの作家の1作品の短い原文抜粋について注と日本語訳と解題がつく。本文300頁をみごとに配分したというほかはない。気持ちよく読めて、たのしかった。

*

本書(以下「柴田文学史」と書く)は序章の書き出しで「ドイツ文学とは何か?」と問い、「ゲルマン民族の移動により5世紀ごろから今のドイツの地に住みついた人々が、周囲のさまざまな他文化と接触し、さまざまに変容しながら、書き継いできた文学——その周辺で書かれたものもすべて含めて、それがドイツ文学である」と答えたうえで、「ドイツ文学の作品に共通した性格」を記述し、「フランス文学に現れる社会」、「イギリス文学が描く社会」を簡潔かつ明解に教えてくれる(4頁)。たしかにそのとおりで、ぼくの学生時代の早稲田大学と世間には英独仏プラス露しかなかったから、これはそれなりになっとくできる。だがいつまで英独仏の文学特性なのか、という気がする。この書物はことし2003年にでた。19世紀までならいざしらず、なぜ2003年になってもイギリス、フランス、ドイツだけなのだろう。いうまでもなく柴田氏やぼくの時代の文学史は英独仏露の文学史しかなく、それは英独仏の政治の歴史にかきなり、文学史をひもとくには英独仏の歴史とのかかわりぬきでは話せなかった。だからこの道筋でしか話せないしこの道筋で話すことしかない。そのとおりなのだ。しかし2003年にはじめてドイツ文学史を学ぶ若いひとのすべてが英独仏の文学のひとつでも読んできたのであろうか。ちょっとドイツ文学を知ってみたい。ドイツ語の単位をとらされたんだけど、ドイツ文学なんてシーラナイ、ドイツのチョウオ

もしろい小説ってなにかある？（「朗読者」ってのは？——そう、でもその題ってナウクない。）

*

ちなみに神品芳夫「ドイツ文学＝歴史のなかで文学の流れをみる」（放送大学教育振興会、第2刷、2000年）をのぞいてみると、その「まえがき」の書き出しは「ドイツ文学というと世間では、難しい、重苦しい、暗い、というイメージで受け取られているようであるが」とある。ほくもそう聞いてきたし、教わってきたし、ついでに告白すれば、そう感じてきた。ただふつうの文脈でいえば「…であるが」には「しかし」がつづき、ほくも「しかし…」とつづきたい。しかし、神品文学史は「それは言い換えれば、意味が深く、内容が豊かで、考えさせられる、ということであるから、人生や社会について考えを深めるための助けとなるのではないか」とつづく（下線は筆者）。つまり難しく重苦しく暗いことが、意味深く内容が豊かで考えさせるという意味になり、さらにほくの意地悪な解釈をつけくわえると、ドイツ文学でないと人生や社会について考えを深めるための助けにはならないといっていることになる。

レッシングは喜劇「ミンナ・フォン・バルンヘルム」第4幕第6場で、気難しく重苦しく暗いプロイセン将校テルハイムにむかってミンナにこう反論させている——なぜ笑ってはいけないのでしょうか。笑うゆとりがあるからこそ本当にものが見えるのではありませんか——。

ついでにいうなら、同じレッシングの「賢者ナータン」は、難しくもなく暗くも重苦しくもない。ほくはドイツ文学のすぐれたコメディのひとつにかぞえる。ちなみに柴田文学史では、この作品を「悲劇でも喜劇でもない、ユーモア劇とでも言うべき劇詩」と紹介している（94頁）。

学問では定義が大切で、だからドイツ文学について概論するときは「ドイツ文学とは」と問うのは当然だろう。しかしある意味では手垢のついた概念を文学史の冒頭にもってきて、それを「言い換え」によって肯定してしまうことは、ほくにはとても気になることなのである。ものごとをひとに教えようとするときは、ものごとの全体像をあらかじめ示してやることは必要だろうが、文学作品についても、それが本当に必要なのだろうか。そもそも示すことができるものなのだろうか。

*

はじめて学ぶもの目で読むと、たとえばつぎのような記述も気になる。

「断末魔の中世封建領主の生き様を地で行った「最後のミネジガー」オスヴァルトが残したかなりの数に上る作品はかえって現代的興趣に富むものだが、やはり文学史上は特別な例である。」（58頁）

「やはり特別な例」だから紹介する必要がない、ということらしい。「はじめて学ぶ」ものにとっては、せっかく「特別な例」だと聞かされたのだから、聞かされるだけでなく、

実際にほんの一部でいいから知りたい、見たい、さわりたい。そうすれば「特別でない例」がどういうものかもよくわかる。文庫本を買えば読める「特別でない例」をまずお勉強なさい、というのは教育者のお考えである。初学者ははじめにとにかくおもしろいものを知りたい。上記の説きかたは「学問的」「教育的」文学教育ではあたりまえのことだろうが、「はじめて学ぶ」柴田文学史は、そのよい面をさらに印象づけるせっかくのチャンスを、ざんねんなことにのがしてしまった。

*

ハイネについて読むと「代表的作家と作品」で「ローレライ」がとりあげられている(178頁以下)。ハイネのどの詩をとりあげても文句はいわない。だがハイネのおもしろい詩やうっとりさせる詩や美しい詩はほかにたくさんある。「解題」についていえば、「歌の本」にかんしては初学者もなっとくするだろうが、「感傷を離れて見ると、ローレライの歌に引き寄せられる舟人と、その物語を思っで憂いに沈む「私」の関係はそう単純ではなく、その解釈もさまざまである」とつきはなされてしまうと、はじめて学ぶものは困ってしまう。子供が遊び仲間に「このいいもの、見せてあげない」といっているようだ。ねえ先生、どうかそのさまざまな解釈をちょっとでもいいから教えてよ、である。それだけではない。「解題」は「しかしまず、誘惑と憂愁が不思議に一体となって作り上げる独特の情趣を味わってみたい」と、さらに読者をつきはなす。読者は解題のとおり独特の情緒を味わうだろうか。その前の「詩概説」で「中でもハイネは、時代と抒情性を一身に統合した突出した存在である」(176～7頁)とあるだけに、いっそうそう思う。

*

上記の「詩概念」の少し前(177頁)には次の一文がある。

「三月革命以後、…古典的な形式と美意識に基づいた詩が多く作られ、家庭雑誌や詞華集によって広められた。19世紀の出版の技術革命、文学の生産・消費拡大もあずかって、2万人以上の詩が出版された。こうした流れを主導したのがバイエルン王のもとに集まった「ミュンヘン派」で、当時は人気を博したが、歴史的には亜流にとどまった。

結局文学史に残ったのは、伝統をふまえながらも、リアリズムの時代にふさわしく、客観的な表現を意識的に探求した人々だった。抒情詩はそもそも主観的な感情の表現である。だが洗練された主観の抑制を美とみなす時代の趣味のもとで、感情を直接伝えるのではなく、それを生んだ体験の情景を描いて、読み手に同じ体験を与えようとする詩が、この時代を特徴づけている。」

*

なぜこの部分がぼくの気になったかといえば、亜流にとどまった詩人たちの、せめて名前だけでもいくつか教えてほしいし、できればほんの一例でいいからこの目で読んでみたいと思ったからであり、文学史に残って読み手に同じ体験を与えようとする詩がこの時代

を特徴づけているのに、「代表的作家と作品」では「ローレライ」しか取り上げられていないからである。はじめて学ぶもののための本書としては不親切ではないだろうか。

*

次にのべることは上記の意味で不親切となるかどうかはわからない。ただ初学者がこれはおもしろいと思うような作品引用がもっとできればいいという意味で書く。

「啓蒙の夢の時代」の「代表的作家と作品」ではレッシングの「賢者ナータン」が示される(96頁以下)。第3幕第7場、ナータンの説く「三つの指輪」寓話にザラティーンが無条件降伏する場面である。この引用はだれもがおもいつくだろう。ただここはユーモアでもコメディでもない、教育者なら誰でも引用したくなる教訓の場なのであり、その紹介なら「賢者ナータン」の主題を解説する文章だけでことたりる。「はじめて学ぶ」ものたちにレッシングの、ひいてはドイツ文学のたのしさを伝えることが眼目なら、そういう場面はほかにたくさんある。天使に救われたというレヒャの妄念をナータンが打ち砕く場面や父ナータンからどういう教育をうけたかをレヒャがザラティーンに伝える場面。一家を虐殺されて絶望するナータンがその直後にはじめてレヒャをだいたときの回想などなど。不謹慎なことをいえば、乙女レヒャを若き日のオードリー・ヘップバーン、さらにはイングリッド・バーグマンが演じたらと、半世紀前、ドイツ文学をはじめて学んだころのほくだったらのしく妄想していただろう。

*

最後に、247頁の「強制収容所での子供時代を描いたブルーノ・アーピッツの『裸で狼の中に』」の下線部は「に運びこまれたユダヤ人幼児の命を守ろうとする囚人たちの必死の活動を」と訂正したい。

同じ頁の数行上に「ピッターフェルトの道」ということばが目に入ったのでついでにひとこと。「ピッターフェルト路線」について知りたいひと、さらには社会主義体制下で書かれた一般向けのドイツ文学史を体験したいひととはぜひ、ハンス・ユルゲン・ゲールツ「ドイツ文学の歴史」(ワイマル友の会訳、1978年、朝日出版社)を手にしてみてください。